

林芙美子（一九〇三年二月三日～一九五一年六月二日）の戦後作品の研究は、戦中の従軍や南方徴用などの芙美子自身の活動に注目がされ、作品ではなく作家としての芙美子に焦点が当てられる傾向にある。近年では「浮雲」〔『風雪』一九四九年一月～一九五〇年八月、『文学界』一九五〇年年九月～一九五一年四月〕が再評価の流れをたどっているが、戦後の他作品はほとんど言及されていないのが現状である。本稿では「浮雲」を中心として、「浮雲」とその他の戦後作品との要素比較を行う。そして作者である芙美子が、どのように戦後という時代から戦争を描いたのかではなく、作品の中で戦争がどのように描かれているのかを考察して行く。

第一章では、作者の基本情報と「浮雲」の研究動向を示し、情報を整理するとともに本稿の位置づけを明確にした。続いて第二章では、本稿で取り扱う「浮雲」に至るまでの戦後作品の研究動向を確認し、「浮雲」にも見られた〈時間〉と〈場所〉という二つの要素に沿って作品精読を行った。そして第三章では「浮雲」の作品精読を行い、その後に第二章で確認できた戦後作品の特徴と照らし合わせた。その結果、戦後作品の中の一つとして見た際の「浮雲」の立ち位置と特徴を明確にすることができた。

「浮雲」を含む芙美子の戦後作品では、戦中の記憶を通じて、戦争や戦中の恋愛を手放さなかった人物が描かれている。芙美子の生涯の中で、突出した位置づけとされる「浮雲」だが、その予兆は「浮雲」以前の戦後作品ですで見られる。また〈時間〉の交錯や〈場所〉の変化という点で見た際に、「浮雲」のゆき子と富岡の動向が一致することはない。このことから、「浮雲」はゆき子と富岡が共生できないことを示すテキストであると考えられる。また戦争被害者と戦争加害者の視線は戦後初期作品から拮抗してはいるが、被害者としての視線は徐々に脱却して行く。「浮雲」とその他の戦後作品の比較を通して、戦争被害者として敗戦を捉えていた戦後作品から、戦争加害者として戦争を反省する作品「浮雲」に至ったと結論づけた。